

「分子軌道法」菊池修著（講談社，1971）pp. 12~17.

### 1-3 LCAO-SCF 方程式

MO  $\phi_i$  をエネルギーの低い順序,  $\phi_1, \phi_2, \dots, \phi_n$  に 2 個ずつの電子をスピンを反対向きにしてつめていった, いわゆる閉殻電子構造をもつ  $2n$  個の電子系を問題にする (図 1-1). この  $2n$  電子系の波動関数は(1-9)式で書かれ, その電子エネルギーは(1-23)式となる. 変分法によってこの MO  $\phi_i$  を求めることになるが, MO 法のほとんどの場合において MO  $\phi_i$  は分子を構成している原子の原子軌道 (AO, Atomic Orbital)  $\chi_r$  の一次結合で近似し,

$$\phi_i = \sum_r c_{ri} \chi_r \quad (1-25)$$

とするので, このときには電子エネルギーが極小になるように LCAO 係数  $c_{ri}$  を求めることになる. 対称性の良い分子では  $c_{ri}$  は一義的に定まるものもあるが一般的にはそうではない. そこで MO  $\phi_i$ , すなわち  $c_{ri}$ , を変化させながら(1-23)式のエネルギーを極小にすることを試みるわけであるが, その際, MO  $\phi_i$  は規格直交化しているという条件が常に満足されているように  $\phi_i$  を選んでいく必要がある.

$$S_{ij} = \int \phi_i(1) \phi_j(1) d\tau(1) = \delta_{ij} \quad (1-26)$$

ここで  $\delta_{ij}$  は Kronecker の  $\delta$  で,  $i=j$  のとき  $\delta_{ij}=1$ ,  $i \neq j$  のとき  $\delta_{ij}=0$  を表わしている. したがって(1-26)式の制限のもとで(1-23)式のエネルギーを極小にする条件を求めるわけであり, これを行なうためにラグランジュの未定乗数法を使う. (1-26)式の  $S_{ij}$  に対する未定乗数を  $-2\epsilon_{ij}$  と書いて  $E$  の代わりに

$$E' = \sum_{i=1}^n 2I_i + \sum_{i,j}^n (2J_{ij} - K_{ij}) - \sum_{i,j}^n 2\epsilon_{ij} S_{ij} \quad (1-27)$$

を極小にする. そのために MO  $\phi_i$  の微小変化  $\delta\phi_i$  に対してエネルギー  $E'$  の変化  $\delta E'$  を計算して  $\delta E' = 0$  の条件を満たすように  $\phi_i$  を定める手続きをとる.

注) (1-9) は Slater 行列式、(1-23) は以下の式:

$$E = \sum_{i=1}^n 2I_i + \sum_{i,j}^n (2J_{ij} - K_{ij}) \quad (1-23)$$

Lagrange の未定乗数法

$g(x) = 0 \dots (2)$  の条件下で  
 $f(x) = y \dots (1)$  の最小(大)を定める方法

次の  $y'$  を定める.  $\lambda$  は係数である.

$$y' = f(x) - \lambda g(x)$$

よって  $\frac{dy'}{dx} = 0$  から求める.

例)  $\phi = \sum c_i \chi_i$

$$\int \phi H \phi d\tau = \sum_i \sum_j c_i c_j H_{ij} = E \quad (H_{ij} = \int \chi_i H \chi_j d\tau) \dots (1)'$$

$$\int \phi \phi d\tau = \sum_i \sum_j c_i c_j S_{ij} = 1 \quad (S_{ij} = \int \chi_i \chi_j d\tau) \dots (2)'$$

規格化条件下で ( $\int \phi \phi d\tau = 1$ ),  $E (= \int \phi H \phi d\tau)$  の最小(大)を求める.

$$y' = \sum_i \sum_j c_i c_j H_{ij} - E (\sum_i \sum_j c_i c_j S_{ij} - 1)$$

よって,  $c_i$  で微分. (注1)

$$\frac{dy'}{dc_i} = 2 \sum_j c_j H_{ij} - 2E \sum_j c_j S_{ij} = 0$$

$$\therefore \sum_j (H_{ij} - E S_{ij}) c_j = 0$$

$$\text{つまり} \begin{pmatrix} H_{11} - \epsilon S_{11} & H_{12} - \epsilon S_{12} & \dots \\ H_{21} - \epsilon S_{21} & H_{22} - \epsilon S_{22} & \dots \\ \vdots & \vdots & \ddots \end{pmatrix} \begin{pmatrix} c_1 \\ c_2 \\ \vdots \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ \vdots \end{pmatrix}$$

つまり  $(H - \epsilon S) C = 0$ . (Hückel 法の式,  $\epsilon = \epsilon_i$  は  $i$  番目の解の値)

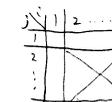
$$(注1) \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n c_i c_j H_{ij} = c_i \sum_{j=2}^n c_j H_{ij} + \sum_{i=2}^n \sum_{j=2}^n c_i c_j H_{ij} + c_i \sum_{i=2}^n c_i H_{ii} + c_i^2 H_{ii}$$

=  $c_i$  で微分すると,  $H_{ij} = H_{ji}$  を用いて

$$\sum_{j=2}^n c_j H_{ij} + \sum_{i=2}^n c_i H_{ii} + 2 c_i H_{ii}$$

$$= 2 \sum_{j=1}^n c_j H_{ij}$$

よって  $c_i$  で微分すると添字 1 が  $i$  になる.



正確には (1-27) は,

$$E' = 2 \sum_i I_i + \sum_{i,j} (2J_{ij} - K_{ij}) - \sum_{i,j} 2\epsilon_{ij} (S_{ij} - \delta_{ij})$$

だから,  $\delta_{ij} = 0$  ならば微分して消えるので (1-27) から省かれ.

よって大胆にも  $\phi_i$  で微分する. しかし  $\frac{dE'}{d\phi_i}$  と書くのは

よけからあるので 微小変化量と誤解する.

クーロン演算子, 交換演算子とよばれる二つの演算子  $J_j, K_j$  を

$$\left. \begin{aligned} J_j(1)\phi_i(1) &= \int \phi_j(2)\phi_j(2) \left(\frac{1}{r_{12}}\right) d\tau(2)\phi_i(1) \\ K_j(1)\phi_i(1) &= \int \phi_j(2)\phi_i(2) \left(\frac{1}{r_{12}}\right) d\tau(2)\phi_j(1) \end{aligned} \right\} \quad (1-28)$$

と定義し, (1-27)式の各積分値の変化がそれぞれ

$$\left. \begin{aligned} \delta I_i &= 2 \int (\delta\phi_i) H_{\text{core}} \phi_i d\tau \\ \delta S_{ij} &= \int (\delta\phi_i) \phi_j d\tau + \int (\delta\phi_j) \phi_i d\tau \\ \delta J_{ij} &= 2 \int (\delta\phi_i) J_j \phi_i d\tau + 2 \int (\delta\phi_j) J_i \phi_j d\tau \\ \delta K_{ij} &= 2 \int (\delta\phi_i) K_j \phi_i d\tau + 2 \int (\delta\phi_j) K_i \phi_j d\tau \end{aligned} \right\} \quad (1-29)$$

となることを考慮すると  $\delta E'$  は次のようになることが導かれる.

$$\delta E' = 4 \sum_i \int (\delta\phi_i) \left[ \left\{ H_{\text{core}} + \sum_j (2J_j - K_j) \right\} \phi_i - \sum_j \varepsilon_{ij} \phi_j \right] d\tau \quad (1-30)$$

この式で  $\delta E' = 0$  とおくと MO  $\phi_i$  の満たすべき次の条件式が得られる.

$$\left\{ H_{\text{core}} + \sum_j (2J_j - K_j) \right\} \phi_i = \sum_j \varepsilon_{ij} \phi_j \quad (1-31)$$

簡単では無いが, (1-28), (1-29) を使って (1-30) が導かれる。  
 (1-30)で, 係数 (微小)  $\delta\phi_i$  に対しても恒等的に  $\delta E' = 0$   
 とする為に [ ] 内がゼロである。しかしこの中では  
 未定乗数法の  $\frac{dE'}{d\phi_i} = 0$  のことと考えるべき。

この(1-31)式の右辺はMOの和で表わされているが,  $\varepsilon_{ij} = \delta_{ij} \varepsilon_i$  と置き換えても良い。これはエネルギー極小条件を求める際に導入された乗数  $\varepsilon_{ij}$  がエルミット行列をつくっていて, この行列  $\varepsilon$  はユニタリー変換によって対角化されるということと, (1-31)式の他の量もユニタリー変換を受けた後も(1-31)式と同じ関係式を満足することが証明できることによる。したがって(1-31)式は次のように書き換えられる。

$$\left\{ H_{\text{core}} + \sum_j (2J_j - K_j) \right\} \phi_i = \varepsilon_i \phi_i \quad (1-32)$$

$\varepsilon_i$  は MO  $\phi_i$  に特有な量と考えることができ, MO  $\phi_i$  の MO エネルギーとよぶ。この量は分子から電子を一個取り除くときのイオン化エネルギーと密接な関係にあって, MO  $\phi_i$  を占める電子のイオン化エネルギーは MO エネルギー  $\varepsilon_i$  の符号を変えた値に等しい (Koopmans の定理)。

2n 電子系のエネルギー(1-23)式は MO エネルギー  $\varepsilon_i$  を使って表わすことができることを示しておこう。(1-32)式の両辺に左から  $\phi_i$  を乗じて積分すると

$$\begin{aligned} \varepsilon_i &= \int \phi_i \left\{ H_{\text{core}} + \sum_j (2J_j - K_j) \right\} \phi_i d\tau \\ &= I_i + \sum_j (2J_{ij} - K_{ij}) \end{aligned} \quad (1-33)$$

ここで定義したおいて,

$I_i = \int \phi_i(1) H_{\text{core}}(1) \phi_i(1) d\tau(1)$	"コア積分"
$J_{ij} = \int \phi_i(1) \phi_i(1) \frac{1}{r_{12}} \phi_j(2) \phi_j(2) d\tau(1,2)$	"クーロン積分"
$K_{ij} = \int \phi_i(1) \phi_j(1) \frac{1}{r_{12}} \phi_j(2) \phi_i(2) d\tau(1,2)$	"交換積分"

(1-33)の導出は,

$$\int \phi_i \left\{ H_{\text{core}} + \sum_j (2J_j - K_j) \right\} \phi_i d\tau = \varepsilon_i \int \phi_i \phi_i d\tau = \varepsilon_i$$

$$\int \phi_i H_{\text{core}} \phi_i d\tau = I_i$$

$$\int \phi_i \sum_j J_j \phi_i d\tau = \int \phi_i(1) \sum_j \left( \int \phi_j(2) \phi_j(2) \frac{1}{r_{12}} d\tau(2) \right) \phi_i(1) d\tau(1) = \sum_j J_{ij}$$

$$\int \phi_i \sum_j K_j \phi_i d\tau = \int \phi_i(1) \sum_j \left( \int \phi_j(2) \phi_i(2) \frac{1}{r_{12}} d\tau(2) \right) \phi_j(1) d\tau(1) = \sum_j K_{ij}$$

$\therefore \varepsilon_i = I_i + \sum_j (2J_{ij} - K_{ij})$

したがって(1-23)式は次のようになる。

$$E = \sum_{i=1}^{2n} (I_i + \varepsilon_i) \quad (1-34)$$

こうして導かれた(1-32)はまさに Hückel 法の  $H\phi = \varepsilon\phi$  と同じ形になった。Hückel 法の  $(H - \varepsilon_i S)C_i = 0$  に対応して  $(F - \varepsilon_i S)C_i = 0$  (1-46) は  $H$  に  $F$  を替えたものになる。以下 2 ページは (1-46) 導出のための数学である。

さて MO を LCAO 近似で表わした場合の係数  $c_{ri}$  の満たす条件も(1-30)式に(1-25)式を代入して  $\delta E' = 0$  とすれば得られる。まず(1-25)式を行列の形で書いておこう。

$$\phi_i = (\chi_1 \chi_2 \cdots \chi_m) \begin{pmatrix} c_{1i} \\ c_{2i} \\ \vdots \\ c_{mi} \end{pmatrix} \quad (1-35)$$

これを単に次のように書く。

$$\phi_i = \chi c_i \quad (1-36)$$

$n$  個の MO  $\phi_i$  に対して(1-36)式と同様の式を書くことができるが、それらはまとめて次のように書けることは簡単に確かめられる。

$$(\phi_1 \phi_2 \cdots \phi_n) = (\chi_1 \chi_2 \cdots \chi_m) \begin{pmatrix} c_{11} & c_{12} & \cdots & c_{1n} \\ c_{21} & c_{22} & \cdots & c_{2n} \\ \cdots & \cdots & \cdots & \cdots \\ c_{m1} & c_{m2} & \cdots & c_{mn} \end{pmatrix} \quad (1-37)$$

これを次のように書く。

$$\phi = \chi C \quad (1-38)$$

(1-38)式の  $\phi$  と  $C$  の関係を用いて(1-30)式を書き換えるが、そのために演算子に対して AO  $\chi$  によって計算される行列を定義しておくに便利である。たとえば  $H_{\text{core}}$  を AO  $\chi_r, \chi_s$  ではさんで積分した

$$H_{rs} = \int \chi_r H_{\text{core}} \chi_s d\tau \quad (1-39)$$

を行列要素とする行列を  $H$  としよう。

$$H = \begin{pmatrix} H_{11} & H_{12} & \cdots & H_{1m} \\ H_{21} & H_{22} & \cdots & H_{2m} \\ \cdots & \cdots & \cdots & \cdots \\ H_{m1} & H_{m2} & \cdots & H_{mm} \end{pmatrix} \quad (1-40)$$

そうすると MO に関する積分  $I_i$  は次のように書くことができる。

$$\begin{aligned} I_i &= \int \phi_i H_{\text{core}} \phi_i d\tau = \int (\sum_r c_{ri} \chi_r) H_{\text{core}} (\sum_s c_{si} \chi_s) d\tau \\ &= \sum_{r,s} c_{ri} c_{si} H_{rs} = \mathbf{c}_i^\dagger \mathbf{H} \mathbf{c}_i \end{aligned} \quad (1-41)$$

ここで  $\mathbf{c}_i^\dagger = (c_{1i}, c_{2i}, \cdots, c_{mi})$  である。この式を使うと MO  $\phi_i$  の微小変化  $\delta\phi_i$  を  $\mathbf{c}_i$  の変化でかくことができる。すなわち

$$\int (\delta\phi_i) H_{\text{core}} \phi_i d\tau = (\delta\mathbf{c}_i^\dagger) \mathbf{H} \mathbf{c}_i \quad (1-42)$$

(1-30)式の他の演算子についても同じように取り扱うことができ、 $\phi_i$  の変化を  $\mathbf{c}_i$  の変化で表わすことができる。そこでそれらの式を(1-30)式に代入すると次式が得られる。

$$\delta E' = 4 \sum_i (\delta\mathbf{c}_i^\dagger) (\mathbf{F} \mathbf{c}_i - \sum_j \mathbf{S} c_j \epsilon_{ij}) \quad (1-43)$$

ここで行列  $\mathbf{F}$  と  $\mathbf{S}$  は次のような行列要素をもっている行列である。

$$\left. \begin{aligned} \mathbf{F}_{rs} &= \int \chi_r \left\{ H_{\text{core}} + \sum_j (2J_j - K_j) \right\} \chi_s d\tau \\ \mathbf{S}_{rs} &= \int \chi_r \chi_s d\tau \end{aligned} \right\} \quad (1-44)$$

$\delta E' = 0$  の成立する条件式は(1-43)式より

$$\mathbf{F} \mathbf{c}_i - \sum_j \mathbf{S} c_j \epsilon_{ij} = 0 \quad (i=1, 2, \cdots, n) \quad (1-45)$$

前と同じように  $\epsilon_{ij} = \delta_{ij} \epsilon_i$  とおくことができるので

$$(\mathbf{F} - \epsilon_i \mathbf{S}) \mathbf{c}_i = 0 \quad (i=1, 2, \cdots, n) \quad (1-46)$$

この式が Roothaan によって導かれた Hartree-Fock の式である。行列  $\mathbf{F}$  は(1-44)式で与えられているが、MO を LCAO で展開して AO だけに関する式に直すと次のようになる。

$$\mathbf{F}_{rs} = H_{rs} + \sum_{j,t,u} c_{ij} c_{uj} [2(rs|tu) - (rt|su)] \quad (1-47)$$

ただし

$$(rs|tu) = \int \chi_r(1) \chi_s(1) \left( \frac{1}{r_{12}} \right) \chi_t(2) \chi_u(2) d\tau(1,2) \quad (1-48)$$

行列を書き換える (1-47) に注意することです。

$$\begin{aligned} I_i &= \int \phi_i H_{\text{core}} \phi_i d\tau \\ &= \int \sum_r c_{ri} \chi_r H_{\text{core}} \sum_s c_{si} \chi_s d\tau \\ &= \sum_{r,s} c_{ri} c_{si} (r|H|s) = \sum_{r,s} c_{ri} c_{si} H_{rs} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} J_{ij} &= \int \phi_i(1) \phi_i(1) \frac{1}{r_{12}} \phi_j(2) \phi_j(2) d\tau \\ &= \int \sum_r c_{ri} \chi_r(1) \sum_s c_{si} \chi_s(1) \frac{1}{r_{12}} \sum_t c_{tj} \chi_t(2) \sum_u c_{uj} \chi_u(2) d\tau \\ &= \sum_{rstu} c_{ri} c_{si} c_{tj} c_{uj} (rs|tu) \end{aligned}$$

